AMCoR
Asahikawa Medical College Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

北の文庫 (2008.09) 48号:8～11.

江戸期の解剖学書を見て思う―メディカル・アーカイブス・コーナーにて―

浅野　泉

江戸期の解剖学書を見て思う
ーメディカル・アーカイブス・コーナーにてー

旭川医科大学図書館
浅野　泉

旭川医科大学図書館では、この春も館内の展示コーナーで、特別展示を行った。展示した貴重書は、いずれも江戸期の医学の和書で「蔵志」「解屍編」「和蘭全躯内外分合図」「解体新書」などである。昨年のオープンキャンパス時にも同じ資料を展示したが、非常に好評だったので再度の展示となったものである。これらの資料は残念ながら本学の所蔵本ではなく、本学名誉教授鮫島先生からの借用本である。

展示期間はちょうど年度替わりの頃でもあったため私を含め図書館スタッフも煩雑な事務作業に追われ、気がつくと図書館内の展示にも関わらず展示本についての知識が乏しかった。これではいけないと、返却期日は迫っていたが図書館長にお願いして図書館スタッフへの解説をお願いした。

「解体新書」はいうまでもなく著名な本で、本学の学生のみならず一般的にも有名な解剖学の翻訳本であるが、そのほかの資料は不勉強にもよく知らなかった。解説をいただいて「蔵志」が日本で最初の解剖学の書、「解屍編」はその次に出た解剖学書、「和蘭全躯内外分合図」は解体新書より早い時期に出来上がった翻訳本と伺い、「解体新書」しか知らなかった自分の不勉強を恥じるとともに「解体新書」のみが注目されている実情に、他の資料が少々気の毒になったものである。「蔵志」は、刑死者の解剖に基づいて著されたものとのことで、現代の詳細な解剖図を見なれた目には、とても精巧には見えなかったが、それでも描かれた時代のことを思えば、筆と絵の具で著された図は、画期的な資料だったのだろうと思った。

さて私は、美術展等で絵画を鑑賞していても、作品そのものではなくその絵などが描かれた背景などを気にしてしまうことがよくあり、この解説を伺った際にも、「解剖した道具はなんだったのでしょうか」などつまらないことを館長に伺って困らせてしまった。時としてさらに余計な疑問や想像に走ることがある。今回も解剖の図と聞いて、最初に思い出したのが、レンブラントの絵画「テュルプ博士の解剖学講義」であった。もうどこの展覧会でみたのか覚えていないが、レンブラントの特徴でもある暗い背景に、白く浮かび上がる解剖体。その絵全体が放つさらに暗い雰囲気に、解剖という行為が今のようにまだまだ禁忌であったのだろうかと感じたのを覚えている。この絵で解剖されているのも刑死者ということ

も薄く憶えており、現代では解剖は死因解明のためや医学への貢献のために世間的にも認められた行為であるが、古くは疎まれた行為であっことを知識として思い出させた。（もっともこの「テュルプ博士の解剖学講義」は解剖を描いた図ではなく、集団肖像画であり、主役はテュルプ博士である。）

http://www.mauritshuis.nl/

西洋でも東洋でも、たとえ死体であっても人間の体を切り開くことは道義的に相当な高いハードルであったことは想像がつく。しかし実際に目のあたりにしなければ人体を解明できないという科学者のジレンマに、古の学者たちは大変な苦労をしたのだろうと思う。

話を元に戻すと、やはり解剖の道具に関する自分のつまらぬ疑問を解消してしまおうと安易にネットで調査をしてみた。現代使用されているメスがこの時代に普及していたとは思えないが、輸入くらいはしているのかもしれない。すると、「蔵志」の書かれた背景が検索された。このころは実際の解剖の行為は下吏が行い、その行為を医師らが観察したと解説されている。解剖の風景（腑分けというそうである）図なども検索でき、医師らは解剖体から離れて観察していたらしい。先のテュルプ博士一行とは臨場感が異なっている。解剖が下吏の行為だとしたら、道具は（輸入していたのかどうかはわからなかった）メスなどではありえないと思った。江戸期の刃物といえば、刀や包丁の類しか思い浮かばないが、高価であろう外来の器具などは使わなかったのではないだろうか。“やっぱり手を汚すのは、下働きのものか…”としみじみと下吏達に同情してしまったりした。一方「解屍編」では、オランダの医学に通じていた河口信任が自らメスを使って解剖を行ったとの記述に少し考えが進んだのかと全くの他人事ながらほっとしてしまった。

それではメスという手術道具はいつごろ作り出されただろうか。ネット検索では全く手掛かりがつかめず、久しぶりに図書を探す羽目になってしまった。検索された図書も以外なほど少なく戸惑ったが、それはメスという道具がかなり古くから存在していたためであるようだった。外科手術のような行為は西洋では歴史が古いらしい（1）。そういえば、古代の遺跡から発掘された骨に手術跡があったとか、遺跡の壁に手術風景らしきものが書かれているらしいとも聞いたことがあった。西洋では石器時代から脈々と外科や解剖学の研究が継続し、一応の完成形が「ターヘル・アナトミア」であったとも記されていた。（オランダで「ターヘル・アナトミア」が出版されたのが、1734 年、解剖を行ったテュルプ博士の肖像画が

描かれたのが 1632 年である。永年の学問の完成形をそっくり輸入できた日本は非常に幸運なのではないだろうか。）

翻って東洋医学を取り入れていた日本では古から体を傷つける行為を忌み嫌い、また（学問の先進国であった）中国からの医学も「切る」という行為がなかったとされている。そういえば日本と中国の中間点（？）韓国のドラマ「チャングムの誓い」でも昔の医療風景が出てきたが、触診だけだったし、ドラマ最後の頃に女医であるチャングムが手術をしたことを「そんなことをしたのか」と非常に慄いていたシーンがあった（ような気がする）。確かに東洋医学は切らないなぁとぼんやりと考えた。だとしたらこの江戸時代に日本で切って直す医学が始まったのだろうか、そのきっかけがこれらの書物なのだろうか。「蔵志」が発表され、それまで正しいとされていた人体に関する今までの知識がどうやら間違いらしいと気付いたのが 1759 年。そして杉田玄白らが「ターヘルアナトミア」の翻訳に取り組み始めたのが 1771 年。オランダ語もままならぬ数名で新しい知識の翻訳に取り組んだ経緯を小説で読んだ ⑵ が、辞書もない頃に手探りで翻訳を進める杉田玄白らの苦労が描かれていてその作業が大変な偉業であることを改めて感じた。（その後、図書館長に日本における外科医療は、「南蛮外科」「紅毛外科」等という名称で江戸期にはそれなりに確立していたと教えていただいた。）

しかし、解剖という先駆的な行為にはその当時の世間の反発が付きまとったことはなかったのだろうか。今でさえ遺体を傷つけることを嫌がる日本で、この時代、おそらく相当な反発を呼んだのではないだろうか。そう考えだすとなかなか想像が止まらない。解剖に手を掛けた彼らは白い目でみられるようなことはなかったのだろうか。遺体を外から診るだけではなく、切って中を見るのだから、おそらく尊敬だけではすまないような気がする。小説では、翻訳本は社会に好意的に受け入れられ、翻訳者もそれなりの地位、名声も得たような物語だったのだが、彼らは解剖をしたわけではないので少し立場が違う。後世での知名度から考えても、手を汚した彼らがあまり報われていないような気がしてならない。ここでまた西洋と比較して、解剖を自ら行い肖像画にしてしまう西洋との文化の差をしみじみと感じている。（先にも書いたように杉田玄白らの翻訳者も並大抵の苦労ではなかったらしいが）。

さて本学図書館でお借りした古人の努力の賜物であるこれらの古文書を前にさらに不勉強な私は想像を暴走させる。「真理がわれらを自由にする」という言葉がある。言わずとも国立国会図書館のスローガンであり、図書館学でも有名な文言である。

だが、私は時々考えることがある。最初に真理に取り組んだ人間は本当に自由になれたのだろうか。精神的には自由に近づくことができたのかもしれない。でも実際の生活では逆に不自由になったのではないだろうか。万有引力の法則を実験したガリレオ・ガリレイだって理解されずに迫害された。宗教上で名誉回復したのは死後 350 年の 1992 年である。真理はすべてを自由に解き放つ必殺技ではないようだ。

そして人の後を必死でついていく凡人でしかない私は、先駆けた行動は絶対にできないと溜息をつきながら、もう一度彼らの残した偉業を見つめるだけである。

参考文献

（1）「メスと手のわざの医療行為」田辺達三、2002 年、札幌、中西出版

（2）「冬の鷹」（新潮文庫）吉村昭、1976 年、東京、新潮社